「宗教と社会」学会
第11回 学術大会

2003年6月14日（土）～15日（日） 筑波大学

「宗教と社会」学会　第11回 学術大会本部
〒305-8571 茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学 哲学・思想学系 山中弘研究室
029-853-4004 (FAX)
ssgakkai@logos.tsukuba.ac.jp
http://www.logos.tsukuba.ac.jp/~ssgakkai/

大会スケジュール

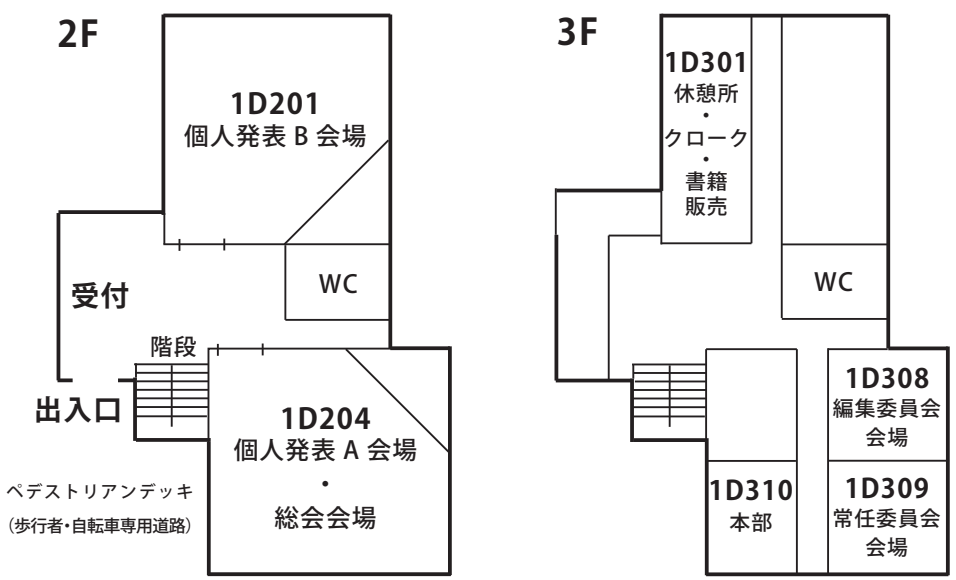
6 月 14 日（土）

11:00 ～	受付 （第一学群 D 棟 2 階ロビー）	11:00 ～ 12:40	常任委員会 （1D309 教室）
13:00 ～ 17:30	個人発表 A 会場（1D204 教室）	個人発表 B 会場（1D201 教室）	
17:40 ～ 18:20	総会 （1D204 教室）		
18:30 ～ 20:30	懇親会 （大学会館レストラン「PLAZA」 ※ 28 ページ参照）		

6 月 15 日（日）

9:30 ～	受付 （第一学群 D 棟 2 階ロビー）		
10:15 ～ 12:00	個人発表 A 会場（1D204 教室）	個人発表 B 会場（1D201 教室）	
12:00 ～ 13:30	昼食	12:10 ～ 13:20	常任委員会（1D309 教室） 編集委員会（1D308 教室）
13:30 ～ 17:05	個人発表 A 会場（1D204 教室）	個人発表 B 会場（1D201 教室）	

会場案内図（第一学群 D 棟）



「宗教と社会」学会
第11回学術大会

日程

2003 年 6 月 14 日（土）・15 日（土）

会場

筑波大学（第一学群 D 棟）

○受付	第一学群 D 棟ロビー
○個人発表 A 会場	1D204
○個人発表 B 会場	1D201
○休憩室・クローク・書籍販売	1D301
○総会	1D204
○懇親会	「PLAZA」 （大学会館レストラン）
○常任委員会	1D309
○編集委員会	1D308
○学会・大会合同本部	1D310

参加費用等

※別添の郵便振替用紙によりお支払いください。
（郵便振替口座番号 00160-2-351696 「宗教と社会」学会第 11 回学術大会事務局）
※振替をもって参加申し込みとします。詳しくは「振替に関するお願い」をご覧ください。

○大会参加費	3000 円（学生 2000 円）
○懇親会費	5000 円（学生 3000 円）

「宗教と社会」学会　第11回 学術大会本部
〒 305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学 哲学・思想学系 山中弘研究室
029-853-4004 (FAX)
ssgakkai@logos.tsukuba.ac.jp
http://www.logos.tsukuba.ac.jp/~ssgakkai/
大会当日連絡先：090-1046-5259（大会本部直通）

個人発表タイムテーブル
6月14日（土）

A 会場（1D204 教室）

(1) 13:00 〜 13:50　ヒンドゥー教における放棄者の象徴的意味と役割
渡辺 たまき（筑波大学大学院）

(2) 13:55 〜 14:45　イスラーム家族法と女性
―イブラーヒーム・カイスィーの見解を中心に―
岩崎 真紀（筑波大学大学院）

(3) 14:50 〜 15:40　宗教とジェンダーをめぐる議論の現在
―日本基督教団・性差別特別委員会の活動を中心に
薄井 篤子（神田外語大学）

(4) 15:45 〜 16:35　物に込められた思いを読む ―スペイン・カタルーニャの祈り―
織田 竜也（国立民族学博物館）

(5) 16:40 〜 17:30　生命主義の概念的有効性の再検討
―現代日本の新宗教を事例として―
樫尾 直樹（慶應義塾大学）

B 会場（1D201 教室）

(1) 13:00 〜 13:50　明治末期における内村鑑三の思想的求心力とその特質
―大正思想史の再構築に向けて―
村松 晋（東京家政学院筑波女子大学）

(2) 13:55 〜 14:45　権威主義体制下ポーランドにおけるカトリック教会
―「三月事件」（1968 年）後の教会内での見解の多様性に着目して―
加藤 久子（ヤギェウォ大学大学院）

(3) 14:50 〜 15:40　軍事占領とキリスト教 ―戦後米軍支配下の沖縄地域社会と教会―
一色 哲（甲子園大学）

(4) 15:45 〜 16:35　聖なる音楽ビジネス？
―米国における CCM（Contemporary Christian Music）とキリスト教
関谷 直人（同志社大学）

(5) 16:40 〜 17:30　都市部カトリック教会における成人入信者のニーズと背景
有村 浩一（カトリック中央協議会）

個人発表タイムテーブル
6月15日（日）

A 会場（1D204 教室）

(1) 10:15 〜11:05　戦死者を表象するかたち ―沖縄戦の記憶と民間巫者の儀礼―
佐藤 壮広（大正大学）

(2) 11:10 〜12:00　インターネットを介した「霊性のネットワーキング」試論
―シャーマニズム復興の視点から―　塩月 亮子（日本橋学館大学）

(3) 13:30 〜14:20　インターネット上の宗教情報の収集と分類
― ARI(Archive for Religions in the Internet) の試み ―
黒崎 浩行（國學院大學）

(4) 14:25 〜15:15　浄土真宗における教義理解について
―インターネット利用状況アンケート調査から―
深水 顕真（日本学術振興会）

(5) 15:20 〜16:10　インターネット上での体験談交換や相談行為の可能性
―宗教に関連する事例について―　田村 貴紀(筑波大学大学院)

(6) 16:15 〜17:05　宗教への関心と信仰程度が価値指向コミュニケーションに
与える効果に関する実証的研究
渡辺 光一（関東学院大学）

B 会場（1D201 教室）

(1) 10:15 〜11:05　「カリスマ運動」とは何か？
藤林 イザヤ（同志社大学大学院）

(2) 11:10 〜12:00　現代日本の聖霊運動の担い手たちに関する一考察
尾本 久美（大正大学大学院）

(3) 13:30 〜14:20　幕末平田派の出版活動とその受容
松本 久史（國學院大學）

(4) 14:25 〜15:15　御嶽系教派神道教団における「祭式」と「行法」
中山 郁（國學院大學）

(5) 15:20 〜16:10　比較神話学前史としての久米邦武筆禍事件
平藤 喜久子（学習院大学）

(6) 16:15 〜17:05　教派神道の地理的拡大とその社会的条件 ―神理教の事例を中心に―
井上 順孝（國學院大學）

6/14（土）13:00 ～13:50 A 会場

ヒンドゥー教における放棄者の象徴的意味と役割

渡辺 たまき（筑波大学大学院）

構造としての社会と、その構造を脱した人間との関わり方をめぐる問題系は、宗教と社会の関係を論じる際の中心的な問題となる。宗教史の伝統には、仏教の比丘やイスラームのスーフィー、カトリックにおける修道僧など、脱構造の人間像の類型が見られる。インドにおいて、それは、社会構造であるカーストの成員「家住者」(gṛhastha) と、秘教的な修行のためにカースト制度から離脱し、なお社会に影響力を持つ「放棄者」(saṃnyāsin) との関わりであるといえる。放棄者が家庭や社会的な地位、財産を放棄し、瞑想修行を行って自己の悟りを目指す一方で、家住者はカーストという厳格で階層的な制度のもとに、職業、婚姻等において、役割を決定されて生きていく。両者の生活様態の差異性にもかかわらず、布施によって生きる放棄者は、家住者に経済的に依存し、また家住者は、放棄者の悟りによって霊的に支えられていると認識しており、両者は併存している。

ルイ・デュモンは、ヒンドゥー教においてはその母体となる社会秩序であるカースト制と放棄者とは、相互補完的な関係にあり、カーストという世俗の外に、放棄者という近代西洋の社会理論に近接した個人が見出されるとしている。けれどもデュモンが近代西欧との比較の前提としているきわめて世俗的な「個人主義的」という基準は、インド人がカースト社会に意味付けている宗教性や、放棄者の動機となる宗教的召命感を考える上では疑問が残る。すなわち超越的実在によって放棄の道へと召命されたという放棄者の意識と、デュモンが彼らの中に見た西洋的個人、超越的な存在からも独立した完全に自律的な個人の理念との間には明確な断絶がある。また、生活規範の面で、対立した関係にある放棄者と社会とが、どのようにして経済と霊性という互いの相互補完性を維持しているのかということは、デュモンの理論からは明らかにはされない。

以上の問題点を考慮すると、インド思想の中にみられる、宇宙が唯一物を原型として展開したとする原型論、またその具体的表象である家住者から放棄者への崇拝形態を参照し、デュモンが「相互補完的」とした関係性に、両者が存在の根源とみなしている「原型」への志向性を附加して考察する必要がある。カーストに留まって子孫をつくり、生産活動を行う家住者にとっての役割とは、社会秩序（＝宇宙）の維持であるが、それは、供犠（＝カースト）によって原型を模倣することで可能となった。そのため彼らにとっては「原型」は必要なものではあるが、それはあくまで社会秩序の維持のためであった。けれども放棄者は、カーストを脱することに象徴されるように、そのような維持という役割をもはやもたず、「原型」へと直接に回帰する事を目的としている。家住者と放棄者の関わりには、原型論を前提とする共通性と、差異性とがあり、同一のベクトルを志向しながら、それぞれに異なった地平にある両者が、宇宙と人間存在の多次元的根源を示しているといえる。

6/14（土）13:55～14:45 A 会場

イスラーム家族法と女性
－イブラーヒーム・カイスィーの見解を中心に－

岩崎 真紀（筑波大学大学院）

本発表では現代のアラブ世界におけるイスラーム社会の女性に関する問題、特に婚姻と離婚がイスラーム法ではどのように規定されているのか、またそれらは現代のアラブ・イスラーム諸国ではどのように受け止められているのかという点について、現代アラブ世界の法学者たちの見解をもとに明らかにすることを目的とする。

イスラームにおいては、神の言葉が書かれている聖典クルアーンが信仰の中心にあり、クルアーンの教えを法として規定したものがイスラーム法である。通常の宗教法が宗教に関連した事柄のみを対象とするのとは大きく異なり、イスラーム法には宗教法的側面と実定法的側面の両方がある。宗教法の側面では、現世的行為も含め信徒の行為全てが法の対象となり、7世紀にイスラームが誕生してから21世紀の今日に至るまで、常にムスリムの生活とは不可分の関係にある。一方、実定法の側面に関しては、前近代まではウンマの法として機能していたが、19世紀後半の植民地政策の下、憲法や刑法、行政法などほとんどの法領域が、近代的法体系に移行した。

しかしながら、このような状況の中でも、婚姻や養育など女性と関係の深い家族法の領域は、多くのイスラーム国において、形の上では近代的な制定法の形をとりつつも、内容はイスラーム法の規定がほぼそのまま、あるいは若干の修正を伴いつつ踏襲されている。行政法や刑法、訴訟法などの法領域とは異なり、家族法の領域が近代法化されなかった理由としては、宗教や地域の伝統、慣習といったものと密接に結びついており、これを西欧の価値観に基づいた法律に置きかえることにイスラーム社会が非常に強く反発したこと、また、西欧諸国の側でも家族法の領域にあえて干渉しなかったことが挙げられるだろう。

イスラーム法において、婚姻における一定の権利は婚姻関係権 (ḥuqūq al-zawjīyah) と総称される。権利・義務という概念は近代以降のものようだが、イスラームではクルアーンにすでに権利 (ḥaqq) という言葉が使われており、女性にも男性にも役割に応じた諸権利・義務が与えられている。

具体的には、夫は妻に対して、性交権や複婚権、懲戒権、一方的離婚権などを持っている。一方、妻は夫に対して、マフル（婚資金）を受け取る権利や扶養請求権などを持っている。イスラーム法の他の規定同様、これらの規定の根拠となっているのはクルアーンやハディースであり、そこに書かれていることと大幅に異なる解釈を行なうことは不可能であり、本発表で考察する事例も基本的には伝統的解釈に則っている。これは、宗教の教えと生活規範が不可分にあるイスラーム社会において、聖典に書かれていることがいかに重みを持っているかということを指し示している。しかしながら、他の事例においては、法学者の解釈に一定の柔軟性を見出すことができるものもある。本発表では、このような解釈の多様性を論じつつ、現代のイスラーム法学者の婚姻や離婚に関する認識について分析する。

イスラーム法は宗教法であり、時代や地域を問わず全てのムスリムに関わる法であるが、その適用にあたっては時代や地域の慣習などとも不可分の関係にあり、広大な地域にわたるイスラーム世界におけるイスラーム法の適用状態を画一的に語ることは事実上不可能である。したがって、本発表においては、特にアラブ地域におけるイスラーム家族法と女性の関係に焦点を絞ることとする。

6/14（土）14:50 〜15:40 A 会場

宗教とジェンダーをめぐる議論の現在
－日本基督教団・性差別特別委員会の活動を中心に

薄井 篤子（神田外語大学）

1960 年代後半のアメリカに生まれたフェニスト神学 (feminist theology) は、聖書解釈と教会の伝統は男性中心的であったという批判から出発した。女性解放にとって宗教は役に立たないと考えるフェミニストも多いが、フェミニスト神学者たちは、宗教的メッセージの重要性を認識し、宗教から新たな人間関係、共同体のモデルを発信しようと模索してきた。他分野に比較すれば、宗教界および宗教研究においてフェミニズムの受容には強い抵抗が存在したが、フェミニスト神学が向き合う問題はキリスト界に広く深く浸透していき、図らずも諸教会の努力に先んじてエキュメニカルな理想にいち早く近づくことにもなった。また、フェミニズムと同様、フェミニスト神学にも「一部の女性たちの価値観を代表しているにすぎない」という痛烈な批判が向けられたが、そうした限界性をも踏まえながらも、欧米キリスト教におけるフェミニズム思想と運動は他の宗教圏、文化圏にも伝播し、影響を与えてきた。

わが国においても、『女性解放とキリスト教』が邦訳された頃（1982 年）から、フェミニスト神学の思想が紹介され、その後、出版物の増加に伴い、次第に各地で勉強会などの場が設けられて浸透していった。フェミニスト神学を介して改めて教えと向き合い、教会・教区・教団という集団組織の一員として従来には持ち得なかった問題意識が浮上し、それらのジェンダー構造およびそれを支えるジェンダー観を問い直す声が高まってきた。それらは概ね女性たちの私的な集まりと見なされることが多く、たとえ公認されたとしても、残念ながら注目されることが少ない。無視されがちのそれらを記録し、その模索の道筋を歴史の中に跡付ける作業は、女性史やジェンダー研究のみず、宗教史にとっても、各教団史にとっても必須であると考える。

本発表では、時間の制約上、主に日本基督教団における性差別特別委員会の活動に注目し、それが教内でどのような問題提起を行ない、どのような議論が展開してきたのかを概観したい。この委員会は 1988 年の教団総会において設置が可決されたが、日本の基督教界においてはまことに小さな委員会である。しかし、それらが提起する問題は深く、重い。

その活動の柱の一つは、『結婚式式文』に関する問題提起である。本発表もそれを中心としながら、同性愛者の教師資格をめぐっての議論、セクシャル・マイノリティの差別問題などとその活動範囲が展開していく中で、委員会のメンバーたちがどのような思想的問い直しや問いかけを行なってきたのかを考察する。

実は、昨年度の総会において、機構改組・改編のため性差別委員会は別の委員会の下に小委員会として設置するという提示が出され、それが否決されたことにより、結果として、専門委員会としての性差別委員会は消滅してしまった。設置から消滅までの約 14 年間の委員会の軌跡は、性差別という問題意識が集団の中で共有・受容されるためにはいかに複雑な過程を辿るのものなのか―つまり、いかに共有されていなかったか―を考えさせる格好の資料でもある。本発表はキリスト教の事例ではあるが、同じような問題は他の教団・集団にもきっと広く見出されるであろう。委員会の歴史が排除されようとする今、双方の言説の分析を通じてジェンダーをめぐる知の権力性や葛藤の過程を検討したい。

6/14（土）15:45～16:35 A 会場

物に込められた思いを読む
―スペイン・カタルーニャの祈り―

織田 竜也（国立民族学博物館）

人が祈るとき、その思いが物に込められることがある。どのようなメカニズムによって「思い」は個体の枠を突き抜けることが可能となるのか。この問いは古くはモースによって発せられ、現在ではフェティシズム研究の範疇に収まる。本発表では発話以前の「思い」を、物を観察することから読み解くことを狙う。正解を求めるのではなくて、人間と世界の繋がり方の一つの形式を、モデル化する方向を模索する。事例はスペイン・カタルーニャの聖地モンセラート（*Mont Serrat*）のはずれにある、サンタコバ（*Santa Cova*）という小さな教会である。

カタルーニャの聖地モンセラートは、日本人にとって富士山が印象的な色彩を訴えかけるような意味で、特別な山である。この山は青空に白い岩肌が突きだした格好で、とても奇妙な造形をなしている。モンセラートは直訳すれば「ノコギリ山」とでもいったニュアンスだが、山というよりは「岩のかたまり」であって、不思議な生命力に満ちている。カタルーニャばかりか欧州、世界中から多くのカトリック信者や観光客がやってくる。

サンタコバはモネレータ（黒マリア）が発見された洞窟で、洞窟を包むようにして、崖っぷちには小さな教会が建てられている。内部の正面には丸く二メートルほど奥にくりぬかれた岩壁が剥きだしになっており、我々はそこで、ピアノ線で宙に浮かべられた十字架のイエスと、その奥に据えられたモネレータの複製に出会う。祈りを捧げる場を通り過ぎて奥の部屋に進むと、そこには人々が置いていった物が数多く並べられている。

―――― なぜ人々はこの教会に足を運ぶのか。

＜物＞

小石・貝殻・人形・靴・トロフィー・色紙・写真・手袋・帽子・赤ん坊の服・ウェディングドレス・義足・本・車のホイール・ナンバープレート・バイクのヘルメット・絵皿・扇子・絵・ぬいぐるみ・ミニカー・杖

＜１枚の紙切れ＞

私の足の象徴であるこのフィギアを証として受け取ってください。ここまで歩いて辿りついたのです。どうかあなたの恩寵を、私の家族や友人にも与えてください。

6/14（土）16:40 ～17:30 A 会場

生命主義の概念的有効性の再検討
－現代日本の新宗教を事例として－

樫尾 直樹（慶應義塾大学）

日本の新宗教の特徴を示しているとされる「生命主義的救済観」概念が提起された「新宗教における生命主義的救済観」論文（以下、生命主義論文と呼ぶ）で指摘されているように、そのアイディアの中心は、世界や自己に「宇宙＝神＝生命」という根源的生命の三位一体のエネルギーが諸存在に流動して生かされているという信念とその事態に対する謙虚な態度であり、それゆえ死生観のレベルでは「死」よりも現世の「生」にプライオリティを置いている点にある。

この生（命）中心主義的な特徴をもつ生命主義的救済観は、その提起後四半世紀を経た現在も日本新宗教の根幹を説明する有効な概念で依然としてあり続けているか、否か。本稿の結論を先取りして言えば、生命主義論文発表以降、生命主義的救済観の危機は加速され、現在はすでに失効しているのではないか、と筆者は考えている。

生（命）中心主義的態度は、結果として死に真正面から対峙しようとする思想と実践を欠如させるが、そこに観察される死の明確なヴィジョンと死への態度の不在は、たとえば一部の若者がオウム真理教に惹きつけられる大きな誘因のひとつとなった、と筆者は考えている。死を超えるにしても、死を経験するにしても、死を真正面から見据えるクールな態度をいかにして獲得し、言葉の真の意味で「生きる」ことができるか。一部を除き、日本の新宗教のほとんどはこの難問に答えようとはしていない。したがって、生命主義的救済観をめぐって翻ってまず問うべきなのは、現代社会において、生命主義的感性によって、現代宗教をどの程度まで理解することが可能なのかどうか、つまり、生命主義的救済観の射程の限界性はどこにあるのか、ということである。

ここでは、生命主義論文で扱われ生命主義的救済観を持つとされる教団の中から世界救世教を、また生命主義論文で扱われているものの生命主義的救済観を持たないとされる教団のひとつである真光を考察対象として選択する。選択理由は、両教団は本稿の問いに答えるに適した対象であると同時に、筆者がここ数年間調査し、一般メンバーの実践の現場を観察してきたということの二点である。

なお、生命主義論文のテキストとしては『思想』に掲載されたものを使用することにする。また、生命主義論文の第一執筆者である対馬路人氏が後に『新宗教事典』で「生命主義的世界観」という用語を使用しているように、「生命主義的救済観」は「救済観」であると同時に「世界観」も示していると筆者も考えているので、本発表では「生命主義的救済観」と「生命主義的世界観」を基本的に区別しないで使用することにしたい。

6/14（土）13:00 ～13:50 B 会場

明治末期における内村鑑三の思想的求心力とその特質

― 大正思想史の再構築に向けて ―

村松 晋（東京家政学院筑波女子大学）

日露戦争前後から大正後期にかけて、日本の思想界を彩った時代思潮は、一般に「大正教養主義」と呼ばれている。この思潮をめぐっては、主として文学・哲学の分野に着目した考察が加えられることにより、その非社会性・観念性が強調されるきらいがある。

しかし大正思想史は、決してそのような内省的傾向に収斂されうるものではない。武田清子氏の先駆的な指摘が示唆するように、漱石・ケーベル門下生や、「白樺派」の作家が台頭しつつあった頃、深い精神性を保ちつつ、文化・社会の革新へと積極的にかかわろうとする一群の青年たちが存在した。彼らはいずれも明治末期に内村鑑三と邂逅し、その体験を立志の基とすることで、学問・伝道の道のみならず、世俗の多様な領域に活躍の場を求めた点で、共通する構えを見せていた。その働きは、前田多門や藤井武、南原繁や矢内原忠雄らの足跡にうかがえるように、いわゆる「大正教養派」の観念性とも、昭和期「革新官僚」の陥れる「技術ニヒリズム」とも異なった、理想主義的な実践性に貫かれていた。

近年、大正期におけるこの一群の思想と行動を評価する動きが見られ、大正思想史の再構築を目指した意欲的な論考も現われている。しかしなぜ、かくも理想主義的な一群が、「時代閉塞の現状」と言われた明治末期に輩出しえたのか、さらになぜ彼らは理想主義的な志を、終生、持続しえたのか、こうした本質的問いかけに対しては、内村への師事の事実が指摘されるのみで、その実存的な連関が十分掘り下げられていないのが現状である。

そこで本発表では内村の言説が、明治末期の精神状況に強い思想的求心力を放った所以について、時代社会の息吹を鑑みつつ、内在的な考察を加えることにより、大正思想史を、宗教・精神の深みから再構築していくための、学際的な場を築きたいと考えている。

顧みて、南原や矢内原など、文化・社会の革新へと積極的にかかわった一群が青年期を過ごした日露戦後とは、戦勝による国家目標の喪失に加え、教育・信仰まで国家の枠に一元化しようとする強権的な政策の遂行により、時代閉塞の度合いが、幾多の「煩悶」青年を生み出すほどに強まった時期だった。このような状況下、内村の言説は、「文明の宗教」としてのキリスト教を説くものでなく、神の前に独り立つ魂の「告白」として、人間の発しうる最も深刻な呻きを吐露するものであるだけに、「大日本帝国」の呪縛に苦悶しつつ人生の意義を問う、時代の青年の実存的関心に、深い次元で呼応する精神性を帯びていた。

同じ頃仏教者の著作が若き読者を多数得たのも、原理的に同じ理由によっているが、内村の言葉はさらに、国家への志において、同時代中、際立った思想性を携えていた。すなわち祖国の霊的再生を、世界に寄与する「日本の天職」と信じた内村の国家観は、維新以来の「国是」に代わる新たな統合原理を問おうとする国内的課題、及び国際的地位の上昇に見合う「新理想」を模索せんとする対外的課題、これら日露戦後の国家的課題を批判的に受け止め直すものだけに、その言説は、閉塞の時代を生きる「明治の青年」に、現状を打破しうる新しい国家ヴィジョンを示すものとして、理念的な展望を与えることになった。

明治末期における内村の思想的求心力は、主にこれら二つの特質に負っているが、上記二点を媒介する要素として、内村の信仰が持つ、その能動性が果たした機能が重要である。

内村は「救い」の意味を、「救済史」に参与すべき「神の器」としての働きに求めたため、内村に師事した人々は、自我救済への祈りと国家・社会への関心とを無関係に「並存」させたり、自閉的な個人主義や自己目的化した敬虔主義に陥ったりする傾向が少なかった。彼らは内村によって啓かれた、国家の理想と国民の責務に対する自覚を定点となし、「隣人」たる祖国同胞を、理想にまで「聖化」する働きこそ、みずからに課せられた「使命」と確信した。内村門下の青年は、この確信に鼓舞されることにより、祖国「聖化」の一端を担うべく、世俗世界においてこそ志を立てた。彼らが学問・伝道の世界のみならず、多様な領域へと分け入ることで、終生、理想主義的視座を保ちつつ、近代日本の課題と主体的に対峙し続けたのは、内村の思想・信仰に示唆された、その社会性ある立志のゆえだった。

ところで彼らは「大正教養派」と異なって、1930年代におけるリベラリズム批判のさなか、個人の自律や精神の自由といった諸理念の意義を強調し続けた。この相違は一般に、「教養派」の非政治性に帰せられてきたが、両者の自己認識の差異に着目するとき、思想的に新たな問題提起が可能となるのではないか。というのも内村門下における自己認識は、「対・絶対者＝神」の下で成立するだけに、精神の自律の問題は、神との絶対的関係に属すものとして厳粛に受け止められていた。ゆえに「自由」をはじめとする諸理念は、単に「西欧近代社会」を成り立たせる「特殊西欧的価値」として文化的に相対化されることなく堅持された。一方、西欧文明を普遍視することで、いわば「対・西欧世界」的に自己形成した「教養派」にあっては、「西欧の没落」が唱えられ、「近代」をマルクス主義ないし「日本的特殊性」によって乗り越えようとする思潮が高揚するなかで、思想的定点を揺さぶられざるをえない。ここに大正思想史の分岐点が潜んでいたと報告者は考えている。

6/14（土）13:55 ～14:45 B 会場

権威主義体制下ポーランドにおけるカトリック教会
－「三月事件」（1968 年）後の教会内での見解の多様性に着目して－

加藤 久子（ヤギェウォ大学大学院）

第二次世界大戦後の旧東欧諸国では共産党による一元的支配体制が敷かれ、その後 50 年にわたって宗教活動は党による制約を受けていた。しかし、そのような体制にあっても、信仰や宗教的実践が様々な形態を取りながら受け継がれていたということは、現在、多くの資料により明らかになっている。ポーランドに関しては、当時のカトリック教会の党への恭順・マルキシズムへの沈黙が批判される一方で、教会を通じたネットワークやその中で行われる諸実践が体制変動の中核を担ったとも言われ、教会は党の一元的支配に反する拠点であったと指摘する論も多い。このように相反する言説は、単に論者の立場の違いから生じたものではなく、この差異にこそ、当時の教会内部の状況を理解する鍵があるのではないだろうか。

実際、ポーランドの教会が党に対して明確な「服従」や「対立」といった意図を示したのはごく僅かの期間であり、両者は全体的に曖昧な関係を保っていたと言える。にもかかわらず、その政策が「服従」や「対立」と定義されることで、国家と教会の関係は相反するいずれかの「極」からのみ論じられて来た側面がある。また、教会の内部に目を移せば、聖職者の間での見解の相違もあり、教区司祭が聖職者集団全体としての統一見解に反する活動や発言を行った例も少なくない。さらに、教会の名の下に出版活動や政党活動などを行っていた知識人まで含めれば、「教会」という言葉が示す領域は余りにも広い。本報告では、これまで 1 つの主体として扱われがちであった教会の、内部における多様性と相互関係に着目する。教会の内側で、諸個人はどのような意図を持ち、何を発信したのか。その中で、聖職者集団全体としては、どのような合意形成が行われ、どのようにそれが表象されたのか。教会という枠組とその中における諸個人を対置することにより、従来の研究では一元的に捉えられて来た権威主義体制下の教会像を問い直すことが可能であると考える。

具体的な事例として、1968 年から 70 年までのカトリック教会をめぐる情勢を取り上げる。ワルシャワ大学を中心とする政治集会に警察が大規模な介入を行った「三月事件」（1968 年）から、元首交代に伴い内政政策が大きく緩和される 1970 年までの間、多くの政治家や知識人の公職追放・投獄などが行われた。その反面、さらなる反発を防ぐ目的もあり、とりわけ教会に対して様々な懐柔策が採られることとなった。これに対し教会側でも、この機を利用して宗教活動の一層の自由を確保しようとする動きと、それに反発して「三月事件」を弾劾し続ける動きとが共存することとなる。本報告では、このように国家と教会それぞれの意図と施策とが交錯する状況を素描し、それが教会内部でどのように理解されたかに焦点をあてたい。主に教会アルヒーフや刊行された手記・通信記録・インタヴュー記録に基づき、司祭および教会を通じて活動を行っていた知識人ら、それぞれの見解や行動について考察する。

このように、これまで歴史解釈が大きく二分されてきた 1968 年～ 1970 年の国家と教会の関係を背景に、当時の教会内部の状況を検討することで、権威主義体制国家における教会のダイナミクスを解明する手掛かりとしたい。

軍事占領とキリスト教
－戦後米軍支配下の沖縄地域社会と教会－

一色 哲（甲子園大学）

本発表の目的は、文献史料の分析や聞き取り調査によって戦後米軍の占領下にあった沖縄においてキリスト教会やそこに集う人々の動向を再現することで、キリスト教の占領体制への協力や妥協、服従と葛藤、離反や反発等々の諸相を明らかにすることである。

分析の対象は現在の日本基督教団沖縄教区につながる沖縄キリスト教連盟（1946 年 2 月～ 50 年 6 月）、沖縄キリスト教会（～ 57 年 3 月）、沖縄キリスト教団（～ 68 年 10 月）（これらを連続性のあるものとして、以下では便宜上「沖縄教会」という）とその関連個人・団体とする。具体的には、沖縄教会に派遣された宣教師と米本国にあるその派遣団体・教派、他教派の沖縄人教会、日本基督教団とそこに派遣された宣教師（派遣団体は沖縄教会に対するものとオーバーラップする）、基地内の諸教派教会と現役軍人であり基地内教会で牧会を行っていたとされる従軍牧師（チャプレン）、クリスチャンである米軍人とその家族などである。

また、それら沖縄教会の信徒・教職者が「福音宣教」の対象としたのは、沖縄戦で破壊されつくし、その後も絶対的支配者として君臨していた米軍の圧制下にある沖縄地域社会なのである。したがって、軍政当局（琉球列島米国民政府）の思惑と行動はもちろんのこと、沖縄に居住する非キリスト者たち、沖縄人の「自治」機構（沖縄諮詢会、沖縄民政府、琉球政府）と先述の人々・団体との関わりも分析の視野にはいる。

戦後、沖縄のキリスト教は沖縄戦によりちりぢりになった信徒がチャプレンや米軍関係者の手で集められ、民間人捕虜収容所のなかではじまったといわれている。そして、指導的立場にあった信徒がたがいに按手礼を施し、伝道者となり、一時期沖縄諮詢会文化部の「職員」としていわば“公務員”として当局から俸給を受けながら伝道活動を開始する。また、米軍の経済的人的支援のもとに教会堂が再建・新築され、米国の援助団体からの資金で戦災孤児のための（実際には米兵と沖縄女性の間に生まれ養育困難となった児童が相当数いた）福祉施設をつくり、幼稚園を造り、戦争で夫を亡くした女性たちを自立させるための事業を興し、米国から入手した最新の機器を使って病院を開き、移動病院車で「無医村」を巡回し、短期大学を創設した。

しかし、沖縄の「戦後復興」にこれだけの貢献をしながら、沖縄のキリスト教は沖縄の住民からその親米（軍）的な姿勢を揶揄されたり、時には非難されたりしていた。これは、米軍政当局が沖縄のキリスト教を宣撫工作の道具として有効であると認め、「慈善」という批判困難なかたちでそれを統治のために利用してきたことが背景にある。

以上、本発表ではいくつかの具体的事実をとりあげて、論証をする。

6/14（土）15:45 〜16:35 B 会場

聖なる音楽ビジネス？
－米国における CCM(Contemporary Christian Music) とキリスト教

関谷 直人（同志社大学）

歴史的に見て、音楽が宗教に対して果たしてきた役割は大きい。とりわけ筆者の研究対象であるキリスト教において、そのことは顕著である。ユダヤ教の中から生まれてきた、イエスをメシアと信じる一群の人々は、イエスの存命中からすでにユダヤ教的の伝統に従って、現在「賛美歌」としてキリスト教の礼拝の中で歌われているものの原型とも言えるような、なんらかのメロディをもったテキストを朗誦していたと考えられている。その後、キリスト教がヨーロッパ世界で支配的な宗教となっていく中で教会音楽も発展を続け、グレゴリアンチャントや壮大なパイプオルガン曲を生み出していくことになる。やがてこうした教会の中から生まれた音楽はバッハ、モーツアルトを経て、教会から自立した芸術としての地位を確立していく。

このような長い歴史的変遷の結果、西洋社会において音楽は大きく分けて教会の礼拝や集会の中で演奏され歌われる、いわゆる「宗教音楽」と Pops、Rock、最近は Metal、Alternative など、基本的に商業ベースの「世俗音楽」の二つの形へと行き着いた。

ところが、このような「俗」と「聖」の棲み分けが明確でない音楽が近年アメリカで注目されている。それが CCM (Contemporary Christian Music) と呼ばれるものである。ベトナム戦争後、若い層のクリスチャンの中から起こった "Jesus Movement" を経て生まれてきたこの新しいキリスト教音楽の流れは、今アメリカのミュージックシーンに大きなインパクトを与えている。

CCM は単純に音楽的なジャンルで分類することはできない。そのスタイルは先にあげた Pops、Rock、Metal、Alternative（最近はラップ音楽も）などおよそ「世俗」の音楽のすべてを網羅している。ただ決定的に他の音楽と異なるのは、そのリリックがきわめて「キリスト教的」であるという点である。この新しい「宗教音楽」のジャンルはもはや「ニッチ」で「新奇」なものではない。アメリカのレコード (CD) 業界にとって、思いもしなかった「ドル箱」になりつつあるのだ。

一方で CCM のミュージシャンたちはいわゆる「宗教右派」の人々が多い。きわめてまじめにキリスト教伝道のために音楽というメディアを利用していると主張するのである。果たして CCM はアメリカにおける「もう一つの」音楽ビジネスなのだろうか？それとも若者を中心とした信徒獲得のための「伝道ツール」なのだろうか。

6/14（土）16:40 ～17:30 B 会場

都市部カトリック教会における成人入信者のニーズと背景

有村 浩一（カトリック中央協議会）

キーワード

「グリフィン講座」、剥奪･激変･新しい価値体系への渇望理論（森岡清美）、「重要な他者」（渡辺雅子）

日本のカトリック教会は、戦後の一時的ブームのあと、教勢の上では見るべきものはなく、年間入信する成人は 4 ～ 5,000 人の間を推移し、90 年代以降逓減傾向にある。西山茂の指摘にもあるように、戦後復興期以降、日本社会の宗教への要求は変遷を遂げたのに対し、カトリック教会はそうした新たな要求に対応していない（「気枯れ社会の実感宗教」『東洋学術研究』1996）。マクロ的に社会全体にインパクトがあるような存在ではなく、カトリック信者の総数は 40 万人あまり、プロテスタントと合わせて人口の 1% 弱という状況が続いている。また、信者の高齢化・教師の高齢化、人材難による教育・医療・福祉施設の放棄といった、将来的に悲観的な状況も多い。

一方で、教団内部の視点から見ると、こうした停滞的状況にあっても、毎年カトリックに入信してくる成人が 5000 人いるとすれば、それはどういう人たちなのだろうという疑問が生ずる。現在のカトリック教会は取り立てて教勢拡大のために運動しているわけではなく（むしろ、もう少しやるべきなのではないかとも思うが）、全国的に受動的にこれら 5000 人の人を迎え入れ、入信のための何らかの教育的過程を経て、入信へといたっているのである。

こうした経緯から、2000 年初頭に教団の企画で、その前 5 年以内に洗礼を受けて入信した 10 人の信者への聞き取りを実施した。対象者は、都会の、しかもカトリック教会の中では比較的新しいアプローチである「グリフィン講座」と呼ばれるプログラムから入信した人たちを選んだ。これは伝統的な教義伝達･学習という方法ではなく、グループダイナミズムを利用し、自分たちの体験を分かち合うことから出発するものである。

この聞き取りの柱とするために、古い論文であるが、森岡清美が提唱した、入信動機としての「剥奪・激変・新しい価値体系への渇望理論」を用い、10 人の被験者それぞれのケースがこれらの分類によって説明のつくものであるのかどうか検討した（「入信の説明理論 －初期日本人キリスト信徒の場合－」『宗教研究』1976）。さらに、入信にいたる間、さまざまな人の介入があり、これらの「重要な他者」の役割が今回の 10 人の入信過程でもどのように作用したのかも検討した（渡辺雅子「新宗教信者のライフコースと入信過程 －大元の一地方支部を事例として－」森岡編『近現代における「家」の変質と宗教』1986）。

もともと、教団内部資料として行われた聞き取りであったので、発表用に手を加えるのに時間を要してしまった。また、検証しようとする仮説が古いのであるが、筆者の調べた限り、近年のカトリック教会信者に対する実証的調査の例にあまり出会うことができず、本稿がその入り口となって、日本社会におけるカトリック、キリスト教存在を検証する調査の端緒となればと希望するものである。

筆者の専門は、キリスト教社会倫理であるので、こうした調査は見よう見まねで不十分な点は多々あるのだが、本稿を公のものにする価値があるのであれば、ご専門諸兄からのご意見を賜りたいものである。

6/15（日）10:15 ～ 11:05 A 会場

戦死者を表象するかたち
－沖縄戦の記憶と民間巫者の儀礼－

佐藤 壮広（大正大学）

戦争および戦死者の記憶の継承は、戦争体験の語り手の減少とともにその体験をいかにつないでいくかという現代の大きな課題である。沖縄本島南部の「ひめゆり平和祈念館」では、戦時下に動員されて生き残った女性たちが、入館者たちに自身の戦争体験を語り聞かせる。沖縄県立平和祈念資料館でも、戦争体験者者の証言を“展示”し、語りの力を生かそうと試みている。刻銘碑「平和の礎」のある平和祈念公園では毎年 6 月 23 日、政府首脳や遺族らが参列し、沖縄全戦没者追悼式典が開催される。式典において、公人らは戦死者に対し「安らかに…」と語りかけるが、戦死者は語らない（ことになっている）。しかし、沖縄本島の民間巫者は、戦死者の「霊」を感受することがある。彼女／彼らが表象する戦死者とは、58 年前の沖縄戦や太平洋戦争で死亡した民間人や兵士などである。その表象のかたちは、戦争体験の証言集等に記録されることはない。だが、これも戦死者の記憶のひとつのあり方である。

本発表では、沖縄の民間巫者研究（主にシャーマニズム研究）に、戦死者の記憶という歴史の問題を重ね合わせ、公的な追悼式典における戦死者の表象のあり方と、民間巫者らが体現する戦死者の記憶と表象のあり方との対比を試みる。端的に言えばそれは、戦死者の均質化を志向するナショナルな語りと、戦死者の個別性と土地に根ざした慰霊を志向するローカルな語りである。これらは「記憶の政治」の問題として位置づけられる。民間巫者らの存在が現代の沖縄をめぐる状況の中にあって浮き彫りにするのは、こうした文化および政治が交錯する現場である。

インターネットを介した「霊性のネットワーキング」試論
－シャーマニズム復興の視点から－

塩月 亮子（日本橋学館大学）

近年、世界各地の宗教復興に伴い、それまで前近代的であるとして否定的にみなされがちであったシャーマン、あるいはシャーマニズムが、エスニック・アイデンティティの表象、あるいは癒しの技法（の専門家）として、肯定的評価を得るようになった。日本でも、沖縄のユタや青森のイタコなど、いわゆるシャーマンに対する再評価が起こり始め、最近は映画や音楽、文学、さらにはインターネットの世界でも、この傾向は顕著にみられるようになった。このようなシャーマニズム復興現象の一側面を明らかにするため、インターネット上にみられる日本のシャーマン・シャーマニズムに関するホームページを調査・分析し、以下の諸点を明らかにすることを試みた。

(1) どのような人が何の目的でどのようなホームページを作成しているのか
(2) どのような人がホームページにアクセスして書きこみをしていくのか
(3) 書きこみの内容は何か
(4) シャーマニズムに関するホームページは何を生み出すのか

まず、日本におけるシャーマニズム関連のホームページについて概観した結果、シャーマニズム関連のホームページは、(1) 学術系 (2) 情報提供系 (3) 実践系 (4) 相談系の 4 種類に大別されること、および日本のいわゆる伝統的シャーマニズムのサイトには (4) の相談系ホームページが多くみられることがわかった。次に、シャーマン自身が作成したホームページ「奄美・シャーマン体験ツアー」と、シャーマン以外の人が作成した「巫女☆クラブ」という 2 つの相談系ホームページを事例として取りあげ、両者の比較検討をおこなった。その結果、両ホームページでは、匿名性の高い人々がインターネットを通じて主に霊的な体験からくる精神的・身体的苦しみを告白し、相互に励まし合う自助グループを形成していること、さらに実際サイトにアクセスした人々がシャーマニズムの伝統がある奄美大島や宮古島などに出向き、そこで地元のシャーマンたちと新たなネットワークづくりをおこなっていることが明らかとなった。このような動きは、アルコール依存症の人々や癌患者同士にみられる自助グループと同様、なかなか他人には理解されずに言えない苦しみをインターネット上の仲間、あるいはシャーマンの前でカミングアウトし、励まし支え合っていくためのネットワーキングとみなすことができる。たとえば「巫女☆クラブ」は、「霊性」にまつわることについて気軽に相談ができ（だがその相談内容は深刻）、気に入れば会員となり、一緒に宮古島のユタ（シャーマン）を訪ね、宮古島の霊地を歩いて共に平和を祈るという機会を提供している。これは、まさにインターネット出現以前には不可能だった、地域や文化を隔てた者同士による苦しみの緩和・相互扶助を目的とした「霊性のネットワーキング」ともいうべき現代的紐帯の出現であるといえる。

このような研究は、宗教学や宗教人類学等で注目されている「霊性 (spirituality)」研究の一助となるものであり、本発表では、霊性を重視したネットワークづくりの現代的な局面の一部を明らかにすることができると考えられる。

6/15（日）13:30 ～ 14:20 A 会場

インターネット上の宗教情報の収集と分類
― ARI (Archive for Religions in the Internet) の試み ―

黒崎 浩行（國學院大學）

1990 年代半ばより、インターネットが普及し、個人が容易に情報にアクセスしたり発信したりする環境が整い始めた。このインターネットの普及は、社会のあらゆる側面に多かれ少なかれ、影響を与えていることは間違いないであろう。その中で、宗教がどのような影響を受けるのかということを問題として、1998 年より、「情報化と宗教に関する研究 ― Computer-Mediated Communication を中心に ―」（國學院大學日本文化研究所プロジェクト）、「コンピュータ・ネットワークの普及と宗教的行為の変容に関する調査研究」（電気通信普及財団助成研究）を、発表者ほか 4 名の共同研究として開始した。「宗教と社会」学会においても 1998-2000 年に「インターネットと宗教」プロジェクトとして始められ、2001 年からは「情報テクノロジーにおける新世代の宗教的インタラクション」プロジェクト（以下、IT 宗教プロジェクトと略）として引き継がれている。

この一連の共同研究の中で、宗教関係のウェブサイトを定期的に収集し、また収集対象サイトのリンク集を公開する試みを継続的に行っている。これは ARI (Archive for Religions in the Internet) と呼ばれ、1998 年 9 月よりリンク集が公開されており、3 月 25 日現在、仏教系 388 件、キリスト教系 329 件、神道系 160 件、諸教 85 件、精神世界 19 件、宗教全般 15 件、その他 3 件の合計 999 件のリンクが登録されている。

現在の IT 宗教プロジェクトでは、たんに宗教関係のウェブサイトを収集するだけでなく、ウェブサイトをどのように分類・分析・評価するか、その方法を開発し、これを通じて、各種の宗教的活動が、どのように情報テクノロジーを活用しているかを調査分析することを課題としている。さらに情報テクノロジーのさらなる進展によって実現すべき、新たな宗教的コンテンツ及び宗教的コミュニケーションの技術的な技法を実験的に開発することが試みられている。この研究目的に従い、関東学院大学の渡辺光一によって、ARI サーバーが再構築された (http://data.shukyo.net/)。

本発表では、再構築に至るまでの総括として、従来の ARI が行ってきた収集・分類の方法を説明し、そのうえで、次の問題点を提起する。

(1) 収集対象となるウェブサイトの選定方針の固定化。初期の共同研究者が調査研究の対象とした宗教団体・個人のウェブサイトを出発点にして登録、収集を継続した。その結果、登録したサイトが移転した場合の追跡や、登録済みサイトからリンクされているサイトの登録作業に比重が偏り、共同研究者によりさまざまな視点をとりいれながら収集対象サイトを広げていく方向性が弱かった。

(2) 評価の抑制。多くのリンク集やサーチエンジンでは、ユーザーの求める情報に関して、Cool などのフレーズや星印による当該サイトの評価ポイントを示したり、評価の高いサイトから順にリストを配列したりといった表示上の工夫を行っている。それに対し、従来の ARI ではこうした評価を抑え、たんに登録順に並べて表示するにとどめている。また、ARI は内部的にサイトの「実践別分類」を行っているが、これも共同研究メンバーのみが登録、閲覧できる。このような方針は初期の共同研究者の討議により決定したものだが、ARI 自体をも巻き込んだインターネット上の相互行為という観点からは一歩身を引いていた。

以上をもとに、他の宗教情報提供の試みとも比較しつつ、再構築された ARI において研究者が利用可能な宗教情報のあり方を考察したい。

浄土真宗における教義理解について
－インターネット利用状況アンケート調査から－

深水 顕真（日本学術振興会）

今日、インターネットは単なるブームではなくコミュニケーションメディアとしての着実な位置を占めている。当然、宗教社会学の視点からは、この新たなコミュニケーションメディアが宗教に与える影響に興味が向く。

しかし、この視点からの調査は、手法上の限界から、宗教系のホームページ発信者に限定されてきた。そこでは、布教方法として新奇なものばかりが注目され、信者の視点から本当に何が教団の中で受け入れられているかを捉え切れていない。

そこで、今回の調査では浄土真宗教団内の各種団体で調査を行うことで、宗教教団の中でのインターネットの影響を総体的に把握することを目指した。

具体的には昨年の浄土真宗仏教青年会全国大会、および仏教壮年会全国大会でアンケート調査を実施し、延べ 1500 人余りの回答を得た。（さらに現在、住職向けの郵送調査を実施中である）

ここでは、以下二つの点についての質問を行った。

1、教団内でインターネットは、他のメディアと比べどの程度利用されているのか。

2、インターネット利用は、教義の理解にどのような影響を与えるのか。

さて、これら一連の調査の結果、次のような知見を得ることが出来た。

A. インターネットを積極的に利用し宗教情報を獲得する信者は、他のメディアも積極的に利用しており、一般に「教団への関与の深い信者層」と理解することが出来る。つまり、インターネットのみが宗教教団へ与える影響を取り上げるのではなく、他のメディアとの関連の中でその影響を考えなくてはならないといえる。

B. 広汎に設定した宗教意識項目に関して、多様なメディアを利用し積極的に教団へ関与する信者層は、「反対」などの否定的な選択肢をとる傾向が見られた。

これまでネットワーク的な組織は、「新たな創造」を生み出すと一般的に考えられてきた。しかし、調査の結果からは、インターネット利用者は他のメディアなども利用し、保守的な「否定意見」を持ちやすいことが見られた。

元来、浄土真宗には「歎異（抄）」を生み出す土壌がある。つまり、「異なることを歎く」ことでその教義の真髄に近づこうとするものである。この背後には、浄土真宗の教義が非常に難解であり、言語化し単一の解釈を与えることの困難さがある。一連の調査結果からは、こうした否定を重ねて教義の輪郭を描こうとする「歎異」の教義理解が、インターネットを介してより広汎に受け入れられていると考えることが出来る。

こうした知見を元に、学会発表当日には、これまでのメディア環境が生み出した『歎異抄』と、インターネットを介した「歎異」の教義理解にどのような差があるのか、より詳しく分析を加えてゆきたい。

6/15（日）15:20 ～ 16:10 A 会場

インターネット上での体験談交換や相談行為の可能性
―宗教に関連する事例について―

田村 貴紀（筑波大学大学院）

宗教教団によるインターネットの利用が普及する中、掲示板を設置して意見交換をしたり、メールによって相談をしたりすることは一般的になった。そしてそこから、時には実際に教団を訪れて入信に至るというケースもある。宗教教団の電子インターネット利用の中で、これらの相談行為や意見交換は最も重要な事柄の一つである。

現状のインターネットには「誤解が生じやすい」などの限界があるものの、体験談交換や相談行為という形で宗教に関連するコミュニケーションを行うことは、一定の割合でひとびとに支持されることであり、今後も重要性を増していくと発表者は考える。インターネット上のコミュニケーションに対しては、宗教関係者・哲学者からの批判があり、その批判には妥当性もあるが、なおかつ上記のようなコミュニケーションの可能性は残っている。

本研究では、この仮説をアンケート調査によって実証的に検証することを試みる。2002 年 7 月にインターネット・ユーザーを対象に、オンライン・アンケートを実施し、569 件の回答を得た。調査は、既存の無作為抽出の調査結果に性別・年齢構成を近似させる、割り当て法で行った。

(1)「自覚的信仰」(2)「体験談交換」(3)「インターネットにおける精神的交流の可能性」の、三つの質問項目の結果から、次のことがわかった。

- ●自覚的に現在信仰を持っていると答えた人は、10.5% だが、信仰は持っていないが宗教には関心があるという人は、16.2% いる。
- ●信仰の有無を問わず、半数程度の回答者がインターネットを使っての体験談交換・相談行為に興味を持ち、特に他者の体験を読むことに興味がある。一方、インターネットを通しての精神的なコミュニケーションの可能性については、肯定する人々が約 30% と少ない。体験談交換や相談行為を行っているが、インターネットのメディアとしての評価に関しては意見が分かれる。言い方を変えれば、体験談交換・相談行為を行いながらも、その関係に没入し無批判なのではなく、その問題点も理解して利用している。
- ● (1) (2) の質問項目を主成分分析にかけ、最も成分負荷の高かった「 他人が書いた、好きなものや、感動した事柄についての書き込みを読んだ」と「心の交流や精神的な価値についてのコミュニケーションが可能だ」の変数を、(1) の「自覚的信仰」の変数とクロス表にして分析した。

  (1) の変数のうち、「現在、信仰をもっている」群よりも、「信仰はもっていないが、宗教には関心がある」群が、体験談交換・相談行為に関心が高く、「心の交流や精神的な価値についてのコミュニケーションが可能だ」という認識において割合が高い。この群は、宗教に関心がありかつインターネット上での精神的なコミュニケーションに肯定的なので、非信者であるが教団などにインターネットを利用してコミュニケーションを図るひとびとと重なると言える。

これらの結果から、現状のインターネットには限界があるものの、体験談交換や相談行為という形で宗教に関連するコミュニケーションを行うことは、一定の割合でひとびとに支持されることであり、特に「信仰はもっていないが、宗教には関心がある」人々にとって意味があると言える。

宗教への関心と信仰程度が価値指向コミュニケーションに与える効果に関する実証的研究

渡辺 光一（関東学院大学）

我々は、**情報やコミュニケーションに関わる行動を個人の実存的な価値追求のための営みと見る**立場から、実存的な価値追求の一般的な程度（以下、価値指向性と呼ぶ）が情報やコミュニケーションに関わる行動（以下、情報コミュニケーション行動と呼ぶ）に強い効果を与えるのではないかとの基本的な仮説を有している。そして、そのような仮説を前提とすると、従来研究で取り上げられてきたオピニオンリーダー性や情報イノベータ性という基準よりも、宗教や政治やNGOなどの活動にどれだけコミットしているかという基準のほうが、価値指向性の現実的な指標として相応しいと考える。ある人に宗教や政治やNGOなどの活動にどれだけコミットしているかを尋ねれば、複数の調査指標を質問するという煩瑣な手続き抜きにして、その人の実存的な価値追求の一般的な強さ（つまり、価値指向性）を容易に知ることができるからである。分けても、我々は「宗教にどれだけコミットしているか」を見るほうが、政治やNGOについて見るよりも、より有益であると考えている。確かに、政治やNGOにコミットしている人は、実存的な価値追求を強く求めているといえるだろう。しかし、そこで追求される価値観には多様な方向性があるため、一般的な測定・考察ができない。一方で宗教は、世界全般への根源的了解を求める強い実存的な価値追求の営みであり、社会や人生全般を価値付け、多様な価値観の方向性すべてに当てはまる動機付けを提供する。

つまり宗教は、政治やNGOよりもさらに広く深いコミットメントを引き出すものであり、実存的な価値追求の一般的な強さをそれだけに的確に代表すると期待できる。以上の理由により我々は、**「宗教にどれだけコミットしているか」を見ることが価値指向性の指標としてより有益である**と考え、価値指向的な情報コミュニケーション行動を見る上で、宗教という素材に大いなる可能性を感じているのである。実際、論語や聖書や仏典などにみられるように、宗教的な教義は、宗教集団の中での教祖と弟子の対話から生成されている。そこでのポイントは、より豊かな情報コンテンツをスパイラル的に発展させるような情報コミュニケーション行動が、強い実存的な価値追求を共有したコミュニティを通じて行われていることである。また、**宗教の教義の形成のみならず、その受容においても情報コミュニケーション行動が重要な機能を有しており、その考察は宗教の現代的再生のためにも意義深い。**

以上のような問題意識から、我々は**定量的な調査に基づく実証研究**を行なった。サンプルは、宗教に対する関心を尋ねる質問「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」への以下の4つの回答から4つの宗教関心区分に分けられた。

1. 現在、信仰をもっている（**「信仰あり」**）
2. 信仰はもっていないが、宗教には関心がある（**「信仰なし・関心あり」**）
3. 信仰はもっていないくて、宗教にも関心がない（**「信仰なし・関心なし」**）
4. 信仰はもっていなくて、宗教には嫌悪感がある（**「信仰なし・嫌悪あり」**）

さらに「信仰あり」区分は、過去の布教経験の有無を尋ねる質問から布教経験のある**「布教的信仰者」**と、布教経験の無い**「受容的信仰者」**という二つの信仰者区分に分けられた。

本発表では、実際の調査と宗教関心区分・信仰者区分の概要について説明し、次に情報コミュニケーション行動に関する因子分析とそれら因子を構成する代表的な個別質問とのクロス集計から各区分の特徴を検討し、最後に全体的な考察を加える。

6/15（日）10:15 ～ 11:05 B会場

「カリスマ運動」とは何か？

藤林 イザヤ（同志社大学大学院）

●発表概要

アメリカにおけるペンテコステ運動の動きを、20 世紀初頭からその運動の成立と歴史的展開について概観し、この運動がペンテコスタリズムから「カリスマ運動」へと転じるに至った意義とその本質的な意味について述べる。内容の詳細については、藤林イザヤ、『「カリスマ運動」とは何か？－ペンテコスタリズムから「カリスマ運動」への展開－』（同志社大学神学研究科修士論文、2002 年）を参照のこと。

●発表のポイント

(1). 筆者の生い立ちと問題提起
(2). アメリカにおけるペンテコスタリズムの発祥
(3). 20 世紀のアメリカ社会の変化とペンテコスタリズムの変質
(4). 「カリスマ運動」の発祥とその展開
(5). 「カリスマ運動」とは何か？

●発表目標

ペンテコスタリズムは今全世界的に広がっている。だが、良くも悪しくもアメリカにおける発祥は無視することができない。但し、研究が進んで来るにつれ、いわゆる 20 世紀の聖霊の働きを受け止める運動は、アメリカ固有のものでは無かったことがはっきりしてきた。ある意味で、全世界的に同時多発した出来事と理解されている。

だが、常にペンテコスタリズムの動きについては、アメリカが主導権を握ってきたのは事実である。その背景には、アメリカ社会が 20 世紀において世界の警察的な役割を担う超大国として君臨してきたことがあるであろう。その結果、ペンテコスタリズムの歴史を物語る際にも、常にアメリカの出来事が語り継がれることとなった。

今回の発表では、アメリカ社会とペンテコステ運動の関わり方に注目し、ペンテコスタリズムの本質に迫ることを目標とする。そして、ペンテコスタリズムが「カリスマ運動」に転じていくことにおいても、アメリカ社会の変動が大きく影を落としていることを明示したい。

キリスト信仰は常に社会と共にあった。ある意味で、社会と共に居なければ存在しえないものである。ところが、キリスト教が国教化するに至って、キリスト教は生気を喪失し、制度化・形骸化した機構としてのみ機能するようになってしまった面がある。

キリスト教史を見るなら、制度化した硬直性を打破しようと、幾たびか霊性の回復運動が起こっている。そこには現象として異言を語ることもあった。にも拘わらず、ペンテコスタリズムは成立しなかった。ところが、20 世紀のアメリカでは、ペンテコスタリズムは形を取る。ここにペンテコスタリズムの特異性があると言えよう。そして、この特異性というものは、ペンテコスタリズムが極めてアメリカ的な、アメリカ社会あっての所産の一つである、というところに存在しているのである。

6/15（日）11:10 ～12:00 B 会場

現代日本の聖霊運動の担い手たちに関する一考察

尾本 久美（大正大学大学院）

1. 問題の所在 ── 本発表の背景 ──

これまでの日本のキリスト教研究では、ペンテコステ派をはじめとする聖霊の働きを強調する日本の聖霊運動について注目されることはあまり多くなかった。1999 年に発足した本学会の「日本社会とキリスト教」研究プロジェクトでは、そうした学問的にいわば見過ごされてきた事象に光を当て、具体的な実証的研究の蓄積が課題の一つとされた。2001 年度の「宗教と社会」学会第 9 回学術大会では、研究プロジェクトの総括として同名のワークショップが行われ、発表者も「日本のペンテコステ派について ── 東京都 K 教会のばあい ── 」と題して、発題者の一人として発表を行った。ワークショップでは、発表者が聖霊運動を題材にした発表を行ったとともに、日本の聖霊運動に対する研究の立ち後れについても議論がなされた（『宗教と社会』第 8 号に一部所収）。

本発表は、2001 年度のワークショップで発表したものを前提としているので、それの続編と位置づけられるだろう。

2. 本発表の目的と内容

本発表では、とくに日本の聖霊運動の担い手たちに焦点を当ててみたい。先述したワークショップでの発表のなかでも、「担い手（信徒）たちについて ── 入信過程と聖霊体験に注目して ── 」として、K 教会でのアンケート調査から得られた結果から入信過程と聖霊体験に関するいくつかの傾向を指摘した。それは、アンケート調査の一部を抜粋したものであった。本発表では、ワークショップで紹介できなかった K 教会の信徒を対象に行ったアンケート調査結果を主な資料とし、また発表者がフィールドワーク等で得られた資料を含めて、現代日本の聖霊運動の担い手たちについて考察してみたい。

なお、本発表において主な資料となるアンケート調査は、2000 年 8 月に K 教会の信徒を対象に行われたもので、調査項目は大きく 5 つに分けられる。それは、(1) 信徒の入信契機・過程について、(2) 信仰生活について、(3) 信仰体験・聖霊体験について、(4) 日本の宗教的慣習に対する意識・行動について、(5) 信徒の基本的属性の 5 つである。郵送調査法を用いて、148 名を対象者として行ったが、有効回答者数は 49 にとどまった。したがって、本調査で得られたデータが一般的な現代日本の聖霊運動の担い手たちの特徴である、とはいえないだろう。しかしながら、これまで日本の聖霊運動の担い手たちについて、こうした調査報告はほとんどなかったのである。そこで、本発表では、一つの事例研究として、得られたデータを紹介しつつ、日本の聖霊運動の担い手たちについて考察を試みたいと考えている。

6/15（日）13:30 ～ 14:20 B会場

幕末平田派の出版活動とその受容

松本 久史（國學院大學）

国学者平田篤胤の思想については、数多くの論考があり、かつ、その社会的な役割についてはいわゆる「草莽の国学者」研究が蓄積され、幕末維新期における地方知識人への浸透や活動が知られている。いっぽう、篤胤の著述については戦前・戦後に全集が編まれ、主要なもののほとんどを知ることができる。しかし、現在の視点からこれらの著述が幕末の時点で存在していたという予断が、篤胤および平田派研究に陥穽を生じかねない。旺盛な出版活動が平田派の大きな特徴であるといえるが、篤胤生前は 20 種を越えるに過ぎない。それが明治の初年にいたっては約 70 種までに出版された著述が増加するのであり、幕末期における出版活動の検討は平田国学研究に重要な意義を持つと考えられる。例えば、篤胤の主著である『古史伝』の出版については、信州伊那における門人たちの上木運動について市村咸人の先駆的な研究があるが、どのような著述がいつ出版されたのかというプロセスの全体をとらえた研究は少ない。また、篤胤の著述自体に関してもその内容を問う論考は多いが、それが出版されたものであるのか、それとも写本として流通したのかという関心は未だ少ないといってよいだろう。本発表は幕末における平田国学の受容に出版流通がどのような役割を果たしたかを、篤胤のどのような著述がいつ出版されたかという出版活動と、維新以前までには約 1000 人に上ったいわゆる「篤胤没後の門人」の形成を関連させることによって明らかにすることを目的とする。

出版された著述の多くは後継者である銕胤によって推進されたが、以前、私は篤胤著述の版本の末尾に付された著述書目目録の変化について検討を加え、慶応年間から明治 5 年ごろにかけて著述書目が頻繁に改訂され著述が増加していくプロセスを見てきた。また、篤胤没後の門人はペリー来航を画期として急激に増加していることが、「門人帳」の記載から理解できるが、門人数の増加に対応して出版活動も盛んになっていくことも看取される。未成稿の著述が多く含まれた目録に代わって、確実に出版された篤胤著述の目録が新たに付されるのも安政期であって、目録を見た門人がそれらを注文することによって、平田派の活動が拡大していく。本発表では、安政期から幕末にかけての出版書目目録の変化から、どのような著述がいつ出版されていったかというプロセスを分析し、一方では門人数の増加とその地域・階層を対応させ、かつ、具体的に書簡等を用いてどのようにして篤胤の著述が出版されたのか、また、その受容の具体像を明らかにすることによって、幕末の国学運動にとって出版の流通が持った意義を考察していきたい。

6/15（日）14:25 ～15:15 B 会場

御嶽系教派神道教団における「祭式」と「行法」

中山 郁（國學院大學）

木曽御嶽信仰に関しては、これまで主に民俗・人類学の立場から、彼らのシャーマニックな性格や修行等の実践について豊富な成果が出されている。しかし、御嶽教等の教団自体は、これまで民俗・人類学サイドからも、教派神道、又は近代宗教研究の側からも、ほとんど取り上げられる事はなかった。その理由として、民俗研究者の立場からは、習合宗教色を薄め、神道化した教団に調査対象としての価値をそれほど感じられなかったこと、更に教派神道研究の立場からは、教団自体に明確で、特色的な宗教思想や「教え」がみえにくく、教団研究の土俵に乗せにくかったということが挙げられよう。この、いわば思想性が薄く、濃厚な身体性を持つこれらの教団を、教派神道・または近代教団研究の土俵に上げるためには、彼らの思想性ではなく、儀礼や行法等の、身体レベルに注目する視座を設けることが有効であろう。それによって、今迄研究対象としにくかった山岳信仰系の教派神道教団を、近代宗教史や所謂「国家神道」研究の議論に引き寄せることが可能になると思われる。そこで、本発表では、これらの問題を身体レベルからみていく視座として、御嶽系教団や教会に見られる神道的な儀礼（祭式）と、呪術や修行の実践（行法）という、ふた通りの実践体系に着目し、御嶽教と木曽御嶽本教という、ふたつの教団の事例から、これらが果たす役割について、教団／講・教会／行者・先達といった、3 つのレベルについて整理を試み、また、御嶽系教派神道教団における神道儀礼の機能について一定の見通しを得てみたい。

一般に御嶽系教団に所属する各教会は、それぞれ独自の開祖と習合色の濃厚な行法・修行体系を持ち、それが教会と行者個人のアイデンティティーと個別性の拠り所とされ、為に教団本部の求心力が低いのが普通である。これに対し各教団は、祭式、行法等の儀礼体系の整備を通じて影響力を及ぼそうと試みた。御嶽教では 1940 年代から 2 回にわたって試みられた行法統一は失敗に終った。また、木曽御嶽本教では教団行事として「護摩」を行うにあたり、かえって「護摩」的色彩を脱色した「迎え火」行事を創作することで、はじめて各有力教会の合意を得ることができた。行法の統一は「九字一本でも難しい」とされているのである。一方、祭式は両教団ともに、神社神道の祭式が標準的なものとされ、それをアレンジした形で教団祭式が形成され、教会の祭典で使うことが奨励されている。両教団が祭式の整備と普及を志向するのは、それが戦前以来の教派神道系教団としてのアイデンティティーを表出するものであるということのみならず、祭式が教団共有の儀礼とされることにより、個別性の強い行法と、それに基づくアイデンティティーを持つ各教会を、ゆるやかに教団へ、更には大枠での神道に水路付け、ある程度の均質化を計る役割を果たしているからである。祭式がそうした機能を果たせるのは、行法に代表される個別性の相違を、祭式という、行法とは別次元の儀礼によって解消させていることに他ならないからである。以上、御嶽系教団とその下部組織の実践体系として、祭式と行法の併存という問題を指摘することができる。前者は公共性をもち、神道教団という枠組みを象徴し、その公的儀礼体系を形成する一方、後者は各教会や行者の個別性を形成し、極めて習合色が強く、個別の救済儀礼において使われる。この二重構造は、近代の教派神道が持つ国家のもとでの公共性と、近世以来の習合宗教としての個別性の併存とパラレルな問題なのである。

6/15（日）15:20 ～ 16:10 B会場

比較神話学前史としての久米邦武筆禍事件

平藤 喜久子（学習院大学）

歴史学者の久米邦武（一八三九～一九三一）は、明治二四年（一八九一年）、『史学会雑誌』に「神道は祭天の古俗」という論文を発表した。この論文で久米は、神道について、天を祭るという広く他地域の宗教とも共通する風習を残しているものであるという立場から、新嘗祭も三種の神器もみな天を祀るためのものであり、さらに、伊勢神宮もまた、本来天を祀る場所であったのだと論じた。この論文は、神道や日本神話について、日本においてはじめて比較宗教学、比較神話学的研究を試みたものとして、大変興味深いものとなっている。

しかしこの論文は、翌明治二五年（一八九二年）に田口卯吉が、みずから主宰する雑誌『史海』に挑発的な序跋を添えて転載したことをきっかけに、国学者や神道家たちの激しい反感を買うこととなった。彼らの反感は、大きな運動となり、掲載雑誌である『史学会雑誌』、『史海』は発禁処分に、久米は東京帝国大学の教授職を非職となった。この筆禍事件の影響は大きく、その後、明治三二年（一八九九年）に高山林次郎（樗牛）、姉崎正治、高木敏雄らが相次いで論文を発表するまで、日本神話の比較神話学的研究はほとんど発表されなかった。つまりこの事件から、日本における神道研究、神話研究が、その萌芽期から大きな社会的な制約を加えられることになったことがわかるのである。

この筆禍事件は、宗教、神話及び古代史の自由な研究を弾圧したものとして、昭和期の津田左右吉の事件とともに大変有名であり、事件の経緯や歴史学上、思想史上の意義については、すでにいくつかの詳細な論考が発表されている。しかし、久米の論文の比較神話学、比較宗教学の学説史上の位置づけや、この事件とその後の神話研究との関係については、いまだ充分な検討は加えられていないようである。

そこで本発表では、あらためて久米論文を見直し、さらに筆禍事件の経緯を確認し、その学説史上の位置づけを考えてみることにしたい。

教派神道の地理的拡大とその社会的条件
― 神理教の事例を中心に

井上 順孝（國學院大學）

明治期における教派神道の地理的展開がどのようになされたかを神理教を例にして考察する。幕末維新期から明治にかけての神道系新宗教及び教派神道の地理的展開を支えた要因を探るのが目的である。基本的に宗教地理学及び宗教社会学的視点からの議論である。

近代以降の宗教の展開は、それ以前に比べて量的な拡大が短期間に行われるようになった。宗教政策の転換により、布教活動自体が江戸時代に比べて格段にやりやすくなったという政治的条件も大きいが、近代化にともなう社会変化（たとえば交通手段の変化、人口の流動化、社会層の変化など）も重要である。

初期の神道系新宗教としては、黒住教、天理教、金光教が代表的であるが、これらは農村地域に運動が成立し、教祖の弟子たちの活動により、地域的な拡大が顕著となる。今回取り上げる神理教は、現在の北九州市に当たる地域で運動が形成され、主に西日本に支部が拡大していった教団である。講席が開かれたのが 1877（明治 10）年であり、神道教派として一派独立したのは、1894 年である。その後 10 年間に、教師数も約 500 人から約 2000 人へと急速に増えている。

神理教の教祖佐野経彦（1834 ～ 1906）は、日本がキリスト教化することへの不安を感じつつ、神道布教への強い意欲を見せた人物である。彼は紀行文、日誌の類を丹念に記録する性格であったので、宗教運動を開始してからどのような地域を巡ったかがかなり細かく分かる。九州が中心であるが、東京にも何度か上京している。上京したときの様子は『東行記』（1881 ～ 82 年）や『千代田日誌』（1989 ～ 90 年）に記述されている。また、彼の長男でその巡教活動を補佐した 2 代教主の佐野伊豆彦（1868 ～ 1936）は、主に九州、中国地方を回っている。教祖、2 代教主の動いた地域がほぼ分かるということである。

他方、神理教には、一派独立以来の教師名簿が備えてあり、現在まで約 1 万人分に達する。ここには、教師の氏名、住所の他、紹介人、保証人の氏名、住所も記載されている。そのうちの一部がすでにデータベース化されているので、これをもとに地理的展開の量的分析を行うことが可能である。

こうした材料を手がかりにしながら、神理教の拠点がどのような地におかれていったかを分析し、その背景にある社会的条件について考察する。

筑波大学への交通案内

a. 高速バス

○東京駅八重洲南口バスターミナルから「つくばセンター」行き高速バスに乗車
（10 ～ 15 分間隔で運行、所要時間 65 分程度）
→つくばセンターから「筑波大学中央」行きバスに乗り換え
（約 10 分間隔で運行、所要時間 10 ～ 15 分）
「第一学群棟前」または「筑波大学中央」で下車

※高速バスは道路状況によって大幅に遅延する場合があるのでご注意ください。
特に、帰りの東京方面は通常（80 ～ 110 分）よりも時間がかかる場合があります。

b. 鉄道

JR 上野駅から常磐線の「普通」か「特急フレッシュひたち号」にご乗車ください。
土浦、荒川沖、ひたち野うしくの各駅から筑波大学へバスが運行されています。

○ JR 上野駅から常磐線で土浦駅へ（1 時間に 4 本程度、所要時間約 70 分）
→土浦駅で下車、「筑波大学中央」行きバスに乗り換え
（約 15 分間隔で運行、所要時間 40 分程度）
「第一学群棟前」または「筑波大学中央」で下車

○ JR 上野駅から常磐線に乗車（1 時間に 4 本程度、所要時間約 65 分）
→荒川沖駅で下車、「筑波大学中央」行きバスに乗り換え
（約 60 分間隔で運行、所要時間 40 分程度）
「第一学群棟前」または「筑波大学中央」で下車

○ JR 上野駅から常磐線に乗車（1 時間に 4 本程度、所要時間約 60 分）
→ひたち野うしく駅で下車、「筑波大学中央」行きバスに乗り換え
（約 30 分間隔で運行、所要時間 40 分程度）
「第一学群棟前」または「筑波大学中央」で下車

※「特急フレッシュひたち号」は荒川沖駅・ひたち野うしく駅には停車しません。
※荒川沖駅・ひたち野うしく駅からのバスは本数が少ないのでご注意ください。

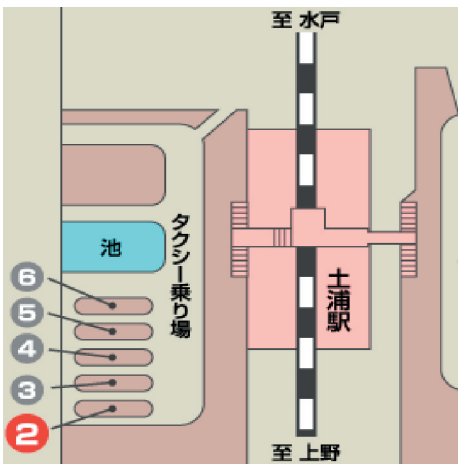
c. 航空機

○羽田空港から「つくばセンター」行き高速バスに乗車
（約 60 分間隔で運行、所要時間 120 分程度）
→つくばセンターから「筑波大学中央」行きバスに乗り換え
（約 10 分間隔で運行、所要時間 10 ～ 15 分）
「第一学群棟前」または「筑波大学中央」で下車

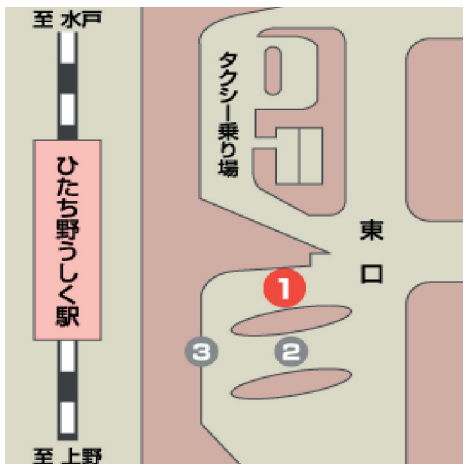
※この高速バスは特に余裕を持ってご利用ください。

○羽田空港からモノレールで浜松町駅へ
→山手線または京浜東北線に乗車、東京駅で下車し高速バスに乗り換え、もしくは上野駅で下車し常磐線に乗り換え（上記 a、b を参照）

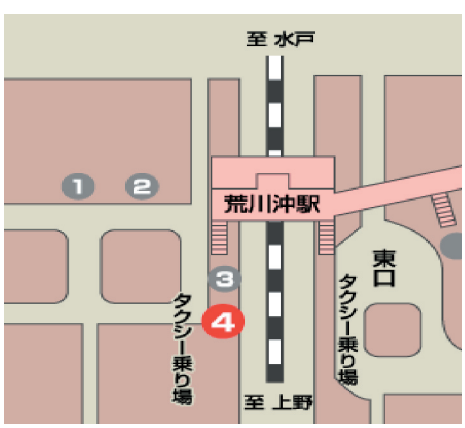
バスターミナル案内図



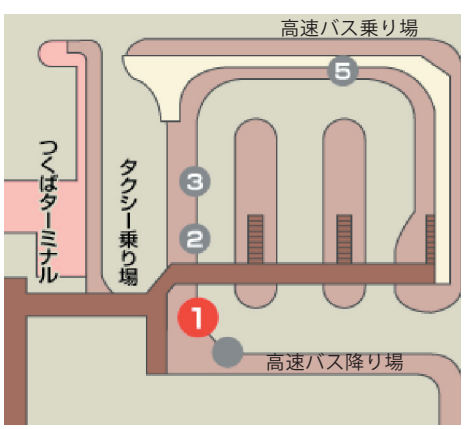
土浦駅（西口２番乗り場）

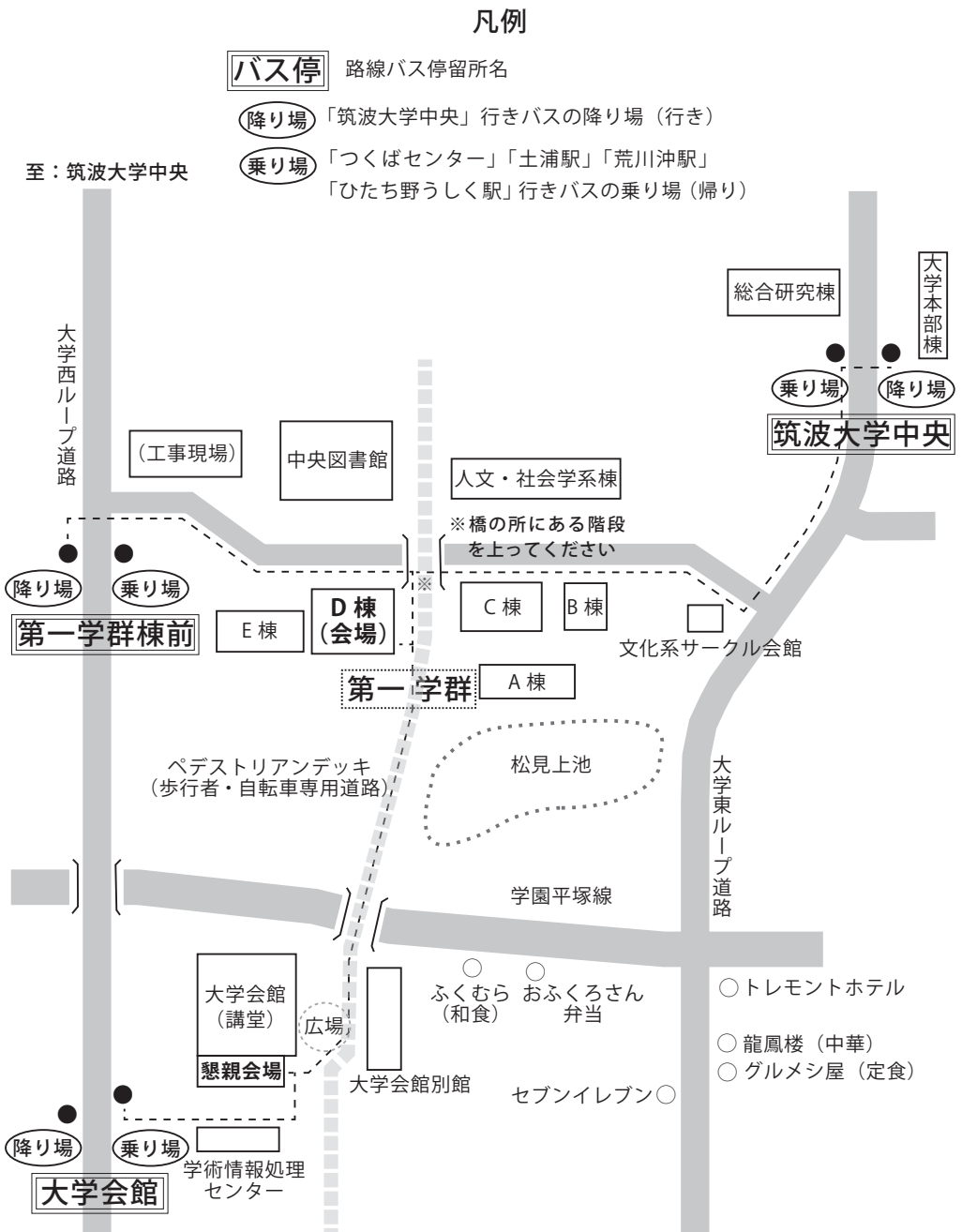


ひたち野うしく駅（1 番乗り場）



荒川沖駅（西口 4 番乗り場）



つくばセンター（1 番乗り場）
※東京方面行きの高速バスは
5 番乗り場です

筑波大学
構内・周辺案内図（概略）